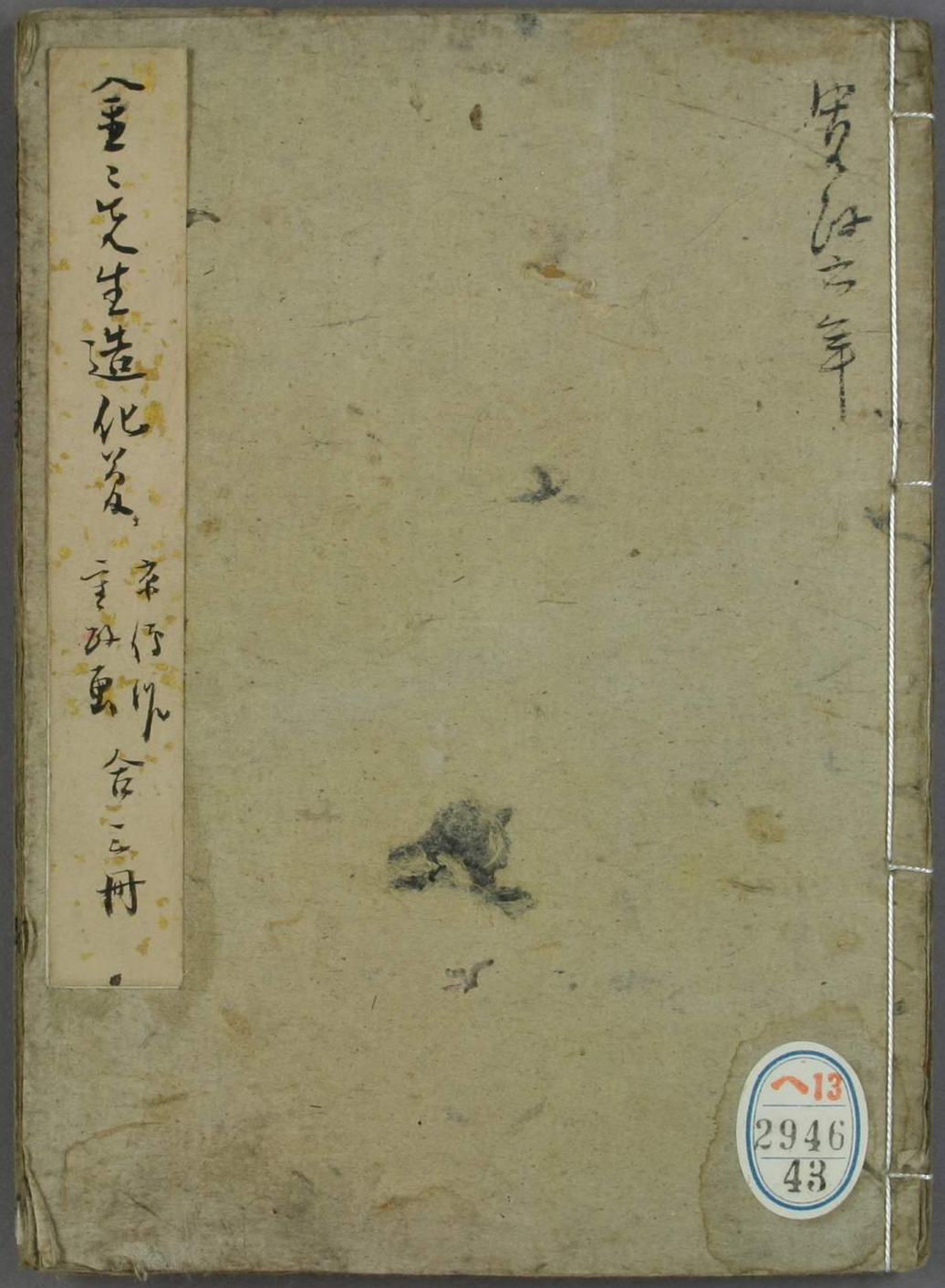

寶永六年
金三先生造化發 京伊作
金子五冊
へ13
2946
43

43
へ13 2972 特
へ13 2946 43

自叙

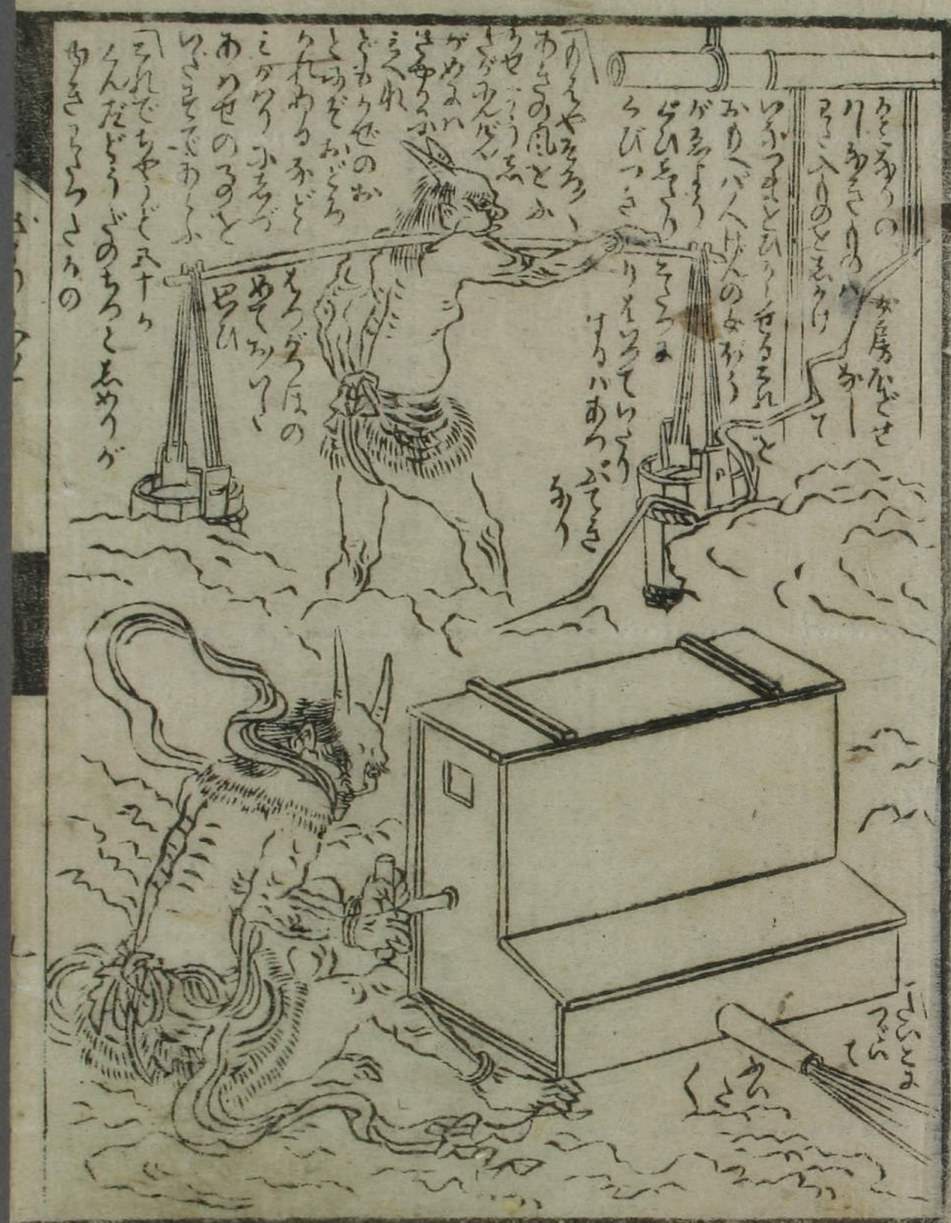
李紳憫農詩曰。鋤禾日當午。汗滴禾下土誰知
盤中飧粒々皆辛苦。宜哉盤中飧粒々一膳
の水漬の飯といふとも粒一粒布一寸といふとも
何ぞ謾に用んや甚恩須弥よりも高し況衣食
器財屋室人間一生日用の萬物と製し出して
る。衆萬人の辛苦を負ひ量ひ比べ偶李
紳が詩を感ずるのみ三巻の稗史小説を作り
甚大意を書して序となすと而已

寛政六甲寅孟陬　山東京傳題

「そこ中さの仙人ちやづけのふくるとあり
すこと
らくんと中
まてあ
ぢさをぐ
とあつ
そこまの仙人山へ
いろちやづけの
せんさらくろ
ふとさう
いぢくて

「あい
らが
ぢいい
やらぢの
きてさ
きて
みる
「そこびきの仙人をまの
仙人ぢきういぢぞ
さらぢーさひきこう
いさまてぜんとこ
らくろ仙人よこそ
ぢいうくぢらうかさいきん
のろくこそぢけてしきろい
ちぢちばみんぜんの
ろうまい
ふし
「そこ中さの
仙人ちやづけの
ふくるとあり
すこと
らくんと中
まてあ
ぢさをぐ
とあつ
ちやづけ
のけと
まくさ
とあり
さくの
仙人

ちやてこの仙女いちやづけのわ
ちやみるまてのしんくいり
「ちやてこの女中みことれて
ふぐしちや
てこの仙
女ごう
「ちやてこの
ちやてこの
「あさうさん
くんのうこ
みんなこ



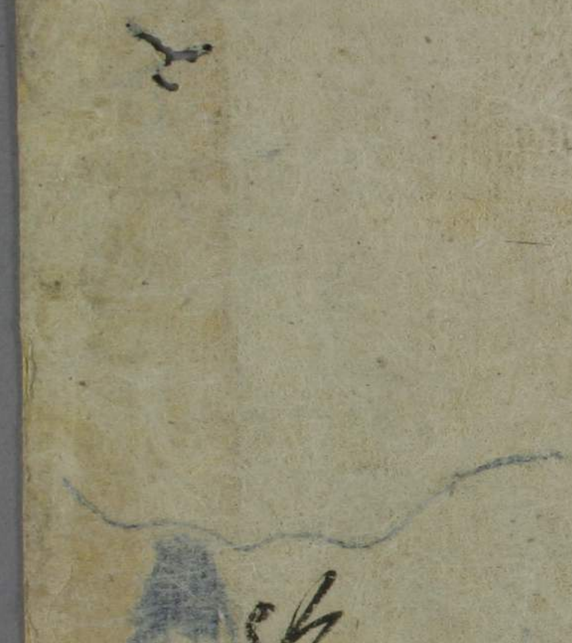
川柳の

おけやの仙人井戸をこしらへるこれはをこしらへをみるの
れあまてへつよ井戸をるつもりそのはのあまりまてよをけるんうをけふどをこしらへる
仙人のおけをこしらへ
めんようをつけていろく
いろ〳〵をそろへる
まぐろのりものを
きるまぶいことあげざるひ
めきけとひろちをぐてたるいまをこしこすこ
いらいていでさあるうどか
どくくれうせまへのちぐるの

金

仙

京傳作

口上

江戸京橋銀座一丁目
京屋傳蔵